

山本 卓明

九州大学病院整形外科 講師

骨粗鬆症に伴って発生する関節破壊の病態解明とその予防

大腿骨頭軟骨下脆弱性骨折（以下 SIF）の病態を明らかにする目的で、その発生頻度を病理組織学的に検索した。変形性股関節症（以下 OA）または ON の診断にて人工股関節置換術を行なわれた 7,718 骨頭（7,286 症例）（OA：7,349 骨頭、ON：369 骨頭）を再検討した。年齢は 13 - 96 才（平均 60 才）であった。SIF は 7,718 例中 501 例（6.5%）に認められた。年齢は 20 - 93 才（平均 68 才）で、79 %（394 例）は 60 才以上であった。女性は 305 例、男性は 196 例、右側罹患が 253 例、左は 248 例であった。疾患別では、OA では 6.3 %（460 / 7349）、ON では 11.1%（41/369）に SIF が認められた。

さらに、脆弱性骨折と続発した 2 次性の骨壊死により 57 才女性の両側の股関節が、10 ヶ月の間に急速に破壊が進行した症例を検討した。病理組織学的に骨壊死を認めたが、いわゆる典型的な特発性大腿骨頭壊死症の組織像ではなく、変形性関節症の後に続発して発生した骨壊死と考えられた。本症例はステロイド内服歴、アルコール多飲歴はなかったが、発症後 5 ヶ月の時点で両側の股関節にステロイド剤注入を行なわれていた。